

建築最前線探る

東事協がパネル ディスカッション

東京都建築士事務所協会（東事協）は21日、東京都新宿区の新宿駅西口広場イベントコーナーで、第33回東京建築賞受賞作品についてパネルディスカッションを開いた。参加者は住宅部門最優秀賞の斜行する洞窟「設計者山代悟+ビル」の建築家山代悟（左）と、共同住宅部門最優秀賞の「代沢レジデンス」（設計＝竹中工務店）などの5作品の設計者が5分ずつ説明し、審査委員とディスカッションした。

パネルディスカッションは、西倉努東事協副会長が進行役を務め、コーディネーターとして、審査委員長鈴木博之東大大学院教授のほか、岡本賢久米設計社長、北泰幸竹中工務店取締役設計本部長、中村勉・中村勉総合計画事務所取締役、福島賢哉・賢プランズ設計事務所代表が出席。入賞14作品のうち5作品について討議した。

鈴木委員長は「質の高さ、表情の豊かさ、幅の広さを感じさせ、将来の可能性を実感させる作品ばかりであった。対峙する課題は増えるばかりだが、今まで答えてできなかったものに、回答



していく姿勢を読み取れ、建築の最前線を見させていたのだ」と講評した。

パネルディスカッションは、東事協が毎年開いている「建築ふれあいフェア」の一環で、ことしは19日から21日まで、建築相談コーナー、セミナー「安心して家を建てるには」などが行われた。

東京女子大・旧東

寮保存も話し合う

また同日、同じ会場では「なくしていいのか建築文化―東京女子大学のレーモンド建築を中心に―」と題した同大学の旧東寮、旧体育館の保存問題についてパネルディスカッションした。

企画は東京女子大学レーモンド建築東寮・体育館を活かす会、日本建築家協会関東甲信越支部保存問題委員会、DOCOMOMO Japan、日本建築仕上学会が協力した。

パネルディスカッションに先立ち、兼松紘一郎DOCOMOMO Japan幹事長（建築家）が「建築保存の現在」と題して講演し、同氏を交えて、小西敏正日本建築仕上学会会長（宇都宮大教授）、建築史家の倉方俊輔、藤原房子東京女子大学レーモンド建築東寮・体育館を活かす会代表の4氏が保存の難しさを話し合った。

この中で、兼松氏は「大学の校舎は、人生の中で最も多感な時代の記憶となるもので、自己の存在を確かめることができるもの。解体は過去を消失させられたような気がする」と、安易な建築計画に警鐘を鳴らした。